

令和5年度は《ハロー・シャイニングブルー》を題材に、「声の響き合いを感じる」ことをテーマに設定した。対象の5年生は、声を合わせて歌う楽しさを感じ、歌詞の内容や曲想にあった表現の工夫をしたいと思っている児童が多いが、その意図や表現を実現するための手段はまだ模索している段階にある。本題材は、全員一緒に声を合わせる斉唱の前半部分と、かけ合いや、音の重なりが感じられる二部合唱の後半部分で構成されており、音楽の縦（ハーモニー）と、横（メロディー）の関係に着目しながら、互いに聴き合い、表現を工夫しながら声を合わせて歌う学習に適した楽曲である。

本実践から見えてきたこと

本実践での新たな試みは、ゲストティーチャー（附属中学校の先輩）による演奏や介入である。中学生4人の歌声や、表情、ハーモニーの良さもさることながら、それを見つめる児童のまなざしが印象に残る。すごい、とびっくりしたような表情で見つめている児童、笑顔で心地よさそうに耳を傾ける児童、真剣なまなざしを向ける児童。それぞれの表情から、先輩の演奏から何かを感じ、聴き取ろうとしていることが伝わってきた。どんなに上手なCDを聞くことよりも、自分たちの一歩先を歩む先輩の歌を聴くことで、自分たちの音楽づくりを、より自分事として捉え、こんな響きで歌うことができたらいいな、こんな風に演奏するには何を工夫すればいいのかな、という目標が生まれ、班別練習や聴き合いに積極的に取り組む姿勢につながった。

音楽の表現の学習は、他教科と比べて「ゴールの設定」が難しい面がある。どのくらいの習熟度を目指すのかを教師側は設定できるものの、児童が自らこのくらい演奏できるようになりたいという到達点のイメージを思い描けるように導くのは容易ではない。ゲストティーチャーの介入はこの点で効果的に働き、児童たちはただ楽しく歌うだけではなく、自ら「学びのものさし」を見つけ、自分たちの現在地を確認⇒今までの活動を省察⇒もっと良くなるために必要なことを考え⇒意見を交わし⇒試してみる、という好循環を生み出していた。ゲストティーチャーと共に、一人一人の児童が工夫を凝らして演奏した最後の合唱は、児童らも手ごたえや一体感を感じ、音楽の良さ・楽しさを最大限に味わうことのできた瞬間となった。

「音楽のもと」から広げていく演奏表現

どのような演奏の工夫をしたいかという先生の問いに対し、児童からは「音の重なり合いと呼び交わり」「響き」「曲の山場」「聴きあい」などの言葉が自発的に出てきており、思いをもって音楽に向き合う姿が見られた。また、例えば「歌詞に合った歌い方」では、その歌詞の感じを出すためにここは優しく歌おう、といったように、「音楽のもと」をスタート地点に、それを音楽表現につなげていくための手立てを考えることができる児童も見受けられた。教科書に記された「旋律」「強弱」「音の重なり」「音色」といった「音楽のもと」をただ知識として教授するのではなく、「音楽のもと」と音楽表現がどのように結びついているのかを思考できるように導く授業設計や、声掛けは多くの教員の参考となるものであろう。

課題と展望（本実践の発展性）

今後は「息の使い方」や「音程」、「言葉の発音」といった他の音楽表現の要素などの新たな考え方・見方を提示したり、児童のしたい表現の実現に必要な、個々の習熟度に応じた歌唱技術の指導方法の方策を検討することで、児童たちの表現はさらに豊かになっていくと期待される。

本時の活動では、多くの児童が音楽に対する考えや思いを言葉にすることができ、音楽と言語活動の往還が活発に行われている様子が見て取れた。継続的に対話的授業を行い、思いを表現するための語彙を蓄積していくことや、発言しやすい学級づくりも大切であると感じられた。また、教師の問いかけの仕方は肝心である。「対話的な授業」では、児童の自由な発想の妨げとならないよう、児童の発言の語彙を補い、肉付けする際には、意図的な方向に誘導・翻訳してしまわぬよう留意することも必要である。

秋田県内では小中隣接型の学校も多くありながら、小中の交流や連携機会は少ないという声もあったため、今回のような事例をもとに、小中連携の学習モデルが開拓されていくと良いと思われる。